
ルルーシュ家執事セバスチャン

水谷元行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルルーシュ家執事セバスチャン

【NZコード】

N8724H

【作者名】

水谷元行

【あらすじ】

執事とお嬢様のしつちやかめつちやかストーリー

ルルーシュ家執事の執事セバスチャンで御座います。（前書き）

最初は日記風にしたかったんですが、自分日記書かないし…

執事の敷きたりなどは作者の妄想がかなり入って居ますので信じない方がよろしいと思います。

b y セバスチャン

ルルーシュ家執事の執事セバスチャンで御座います。

私はルルーシュ家に仕える執事だ。

ルルーシュ家に仕える事になつたのは私が生まれて間もなくこの屋敷の門前に捨てられていたのを先代当主、ルルーシュ・ハウゼン伯爵に拾われ今日に至る。

しかし、もう残念ながら先代は亡くなられ、今は息子のレーべン様が当主を勤められている・・・

20day July.

【改行】

私は有り難い事に大学まで行かせていただき今年の3月、無事卒業できた。この御恩は生涯を通じてルルーシュ家にお仕えすることでお返しできればと思う。

さて、私が執事長補佐を勤めたいたこの屋敷とも今日で最後の夜となつた。

執事長が引退することになつた、ルルーシュ家の別邸にお住まいのお嬢様付執事として明日からお仕えする事となつた、学業も終わり、本格的にルルーシュ家に仕える事の出来る喜びに浸りつつ今宵は眠りに付く事にしよう・・・朝のさわやかの日差しの中、わざわざ、一人の執事のためにレーべン伯爵は見送りに出られた。

【改行】

「セバスチャン、弟の様に思つていた君が私の側を離れるのは寂しい、しかし君にはもつと成長して欲しい、父に成り代わつて言えば『かわいい子には旅をさせよ』と言つたところだろう・・・

兎に角、今よりも更に共に成長した姿でまた会おう・・・」

私も兄の様に慕つていたレーべン様は少し寂しげな顔をされたが、私の成長を楽しみにしていると笑顔を見させてくれた。

「レーべン様必ず成長したお姿をお見せする事をお約束します」と私は深々とお辞儀をし、振り返りうつとすると、

「セバス、元気でな！」と子どもの頃の呼び名で声を掛けられたので私もそれに習い

「レーべンも元気で！」と返した。

レーべン様は昔のようなまぶしい最高の笑顔を見せてくれた。レーべン様は在る時から私が『レーべン様』と呼ぶようになつて長い間それを嫌がつておられたが、自分の立場を自覚された頃から我慢なさるようになった。

これから長く会えなくなると思つと、つい素が出てしまつたのだろう。

私も兄と慕つたレーべン様に応えるべきだと思つたのだ。

周りの者も理解してくれてゐるようで咎める者は居なかつた。

さあ！先代の為にも、レーべン様の為にも成長し、立派にルルーシュ家に仕える執事に成らねば・・・

出かけたのは早朝であつたが、ルルーシュ家別邸の館に付いたのは夕刻であった。

車を降りると、美しい黒の鉄製の門扉、その向こうには美しいシンメトリーの前庭、

前庭を抜けるとそこには美しい館が向かえる。

屋敷に張ると一人のメイドが迎えに來た。

「ルルゴール・セバスチャン様ですね？」案内いたします。」

私は

「あなたのお名前は？」「私はメイドのクリス・レイ！」です

「私は執事です言わばあなた方とは同じ職場の者です。

我々はルルーシュ家を支える裏方同士、様は違うでしょう？」

クリスは立ち止まり頭を下げる。

「失礼いたしましたが、しかし・・・

どうやら困つてしまつたようだ。

「あつははは、その様な事は気になくて良いんですよ、追い追い共に居る中で決まってくるものです」クリスは笑顔を見せた。

館に入るとなんと驚いた事に玄関ホールに左にはメイド右には執事が並び出迎えていた。

一斉に頭を下げる。まるで主でも迎えるような応対に私は、「皆さん手厚い歓迎痛み入りますが、ただの執事の歓迎にしては大袈裟では？」

「私が言つたのよ」玄関ホールに声が響いた。

中央階段一階からセーラー服姿の少女が降りてきた。

「新しい執事長が来るのにね？セバスチャン？まつ、貴方の言つこと最も最もだけど、いいじゃない」と笑つた。

「これは失礼しましたローズお嬢様」と私は頭を下げた。

「いいのよ、これは私の気まぐれだもん」すると、お嬢様は「さつ皆支度して！」パンツと一つ手を叩くと、メイドと執事たちが、ぞろぞろと私に一礼しながら奥へ下がつて行く。

お嬢様は階段を下り、「さつ行きましょ、」と隣に立ち、中央の扉へ進む。

私は一步下がつて後に続いた、途端お嬢様はお怒りになつた。

「セバスチャン！？」一步下がつたりしないで！私の隣に立ちなさい！」

「え？しかし、お嬢様・・・」お嬢様は声を荒げた。

「私が隣に立つてと言つてるの」

私はお嬢様の隣に並んだ。

これは執事としては非常に異例な事だ。

私は更に驚くことになった。

なんと、私の食事の用意がお嬢様と同じテーブルに用意されていた。

「お嬢様・・・これは？」

「貴方は私の許す限り常に私について回つて欲しいの分かつた？」

「はつ、はあ・・・分かりました・・・どうやらお嬢様は執事然

とした事を私に求めていないようだ。

私は上座の席を引きお嬢様に掛けて頂く、私が

「失礼します」と席に着くと

「セバス、それ止めて私そう言つの嫌いだから
「失礼しました」じゃ、始めましょそう言つと、
お嬢様はそれは楽しそうに色々話してくださいました。

まるで学校で級友と話されているかの様に・・・食事の後、お嬢様
はお休みになられた後、

【改行】

屋敷のメイドと執事らと引き続きと挨拶を行つた。

【改行】

翌朝、お嬢様7時になつても起きて来られない。
学校は夏休みだが、あまり遅いのも行けない…

【改行】

「お嬢様、お早づけでいます。」

寝ぼけ眼のお嬢様はまだ、薄ぼんやりしているようだ。

「お嬢様、そろそろ起きられませんと…」すると私は目を見張つた。

【改行】

なつ、なんとワインのビンを抱えている。

私は声を張り上げた。

【改行】

「お嬢様！未成年者が赤ワインとはどう言つ事ですか！？」

飛び起きたお嬢様は慌ててワインのビンを手の上で踊られ、背中に隠した。

強引に

「何の事？」と誤魔化されようとしたが、私は口を開り唱えたよう
に言った。

「今年のボジョレーは如何でしたか？」

お嬢様は観念したようだがまだ繕つよう

「あつ嫌、そのコレはね、その…」【改行】

昨日聞いた通りだ。

お嬢様は度々、夜中に寝室を抜け出し食品庫から勝手にアルコール類を持ち出し、部屋で飲んでいる

お嬢様は続ける

「昨日は新しくセバスチャンが来た事だし、その…歓迎しようと思つて用意したの、でもセバスが他の執事達と何やら話していたようだから待つていようと思つていたらいつの間にか眠つてしまつて、ははは…」

お嬢様は頭をかきながら空笑いしている

「お嬢様？だからと言つてお嬢様がワインを飲んで良い理由には成りませんよ？」

私は諭すように語りかけた。

「セバスのケチ…分かつたわよ…」

お嬢様は少々ムッスリとうなだれて返事を返した。

私はお嬢様に目線を合わせ

「お嬢様？既に味を覚えてしまつた物は仕方有りませんが、大人に成るまで我慢して下さいませ、後三年の辛抱です」お嬢様は少し唸つていて。

私は更に続けた

「二十歳のお誕生日にはお嬢様の生まれ年のワインを開けましょう、お嬢様の年は当たり年で非常に良いものがご用意出来ると思います。お酒の良い飲み方などはお嬢様が大人に成つた時、僭越ながら私がご教授致しましょう。」

するとお嬢様は花が咲いたように明るく成られ

「ホント？」

私は

「お約束致します

さあ、朝食に参りましょ。

もう、給仕係が控えておりますので。」

お嬢様はすっかり機嫌も良くなつたのか

「分かった

着替えてくるから先に行つて…」

「はい！分かりました」

と私は頭を下げ、ワインの瓶を受け取りお嬢様の寝室を出た。これで飲酒も暫く我慢して下さるだら…

私はワインの瓶を厨房の瓶集めに出すと食堂へ向かつた。

入口のドア付近で後ろからお嬢様が走つて来られた。

【改行】

「セバス！今日は出掛けるわよー食事が終わったら支度してね！」
と背中を叩いて食堂へ返事をする間もなく席に着かれた
私を待つているのが表情で読み取れたので、私は速やかに席に着いた。

私はお嬢様とこじやかに食事をしながら思つた…

早すぎる…

お嬢様と打ち解けるのが早すぎる…

何故、お嬢様はここまで早く私と打ち解ける事が出来たのか？

私自信も不思議な親近感を感じて居た。先程のワインの件もそうだ…
一体何故…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8724h/>

ルルーシュ家執事セバスチャン

2010年10月10日17時23分発行